

第20回オーライ！ニッポン大賞 受賞者の概要

◆オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件

1. 特定非営利活動法人SET（岩手県陸前高田市）



大学生インターンシップ。2013年の事業開始以降、これまでに半年間活動する大学生スタッフが500人、1週間のプログラム参加者1,000人が陸前高田市で活動してきた。大学生と関わる住民は年間600人を超えている。修学旅行民泊は2016年の民泊事業開始以降、2024年度までに300軒以上の民泊家庭がのべ14,000人の受入を達成した。受入家庭の収入は合計1億円を超えて、地域

経済への波及効果も非常に大きい。年間受入数は沖縄県伊江島、長野県南信州に次いで全国有数の規模に成長した。震災復興から始まり、いまでは陸前高田だけでなく近隣地域の交流コーディネートまで行うようになった取り組みは、非常に多岐にわたりがつ、絶え間なく人材の再生産を行っているところが非常に先駆的かつ他の被災地域の諸団体と違うところ。こうしたプラットフォームがあることで、都市の若者が地域に入るきっかけとなり、そこから生まれる交流によって高校生などの地域人材の再生産につながっているところも含め、都市と農山漁村の共生・対流の新たなモデルとして高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞

2. 特定非営利活動法人鳴子の米プロジェクト（宮城県大崎市）



観光客がピークの半分200万人にまで減少。農業を辞める農家が増え、耕作放棄地が増加し、鳴子温泉の農村風景も失われようとしていた。鳴子の田んぼや農村風景、暮らしを守るため、平成18年に鳴子の米プロジェクトがスタート。CSA（地域支援型農業）を実践、山間地域の農を持続させている。また、食から農を考えるため、女性たちが働く公式おにぎり屋「むすびや」をスタート

させ、農と食の大切さを発信する拠点となっている。今年で20年目を迎え山間地の農をあきらめず、持続に向け継続してチャレンジを行っている。できることを努力する姿は評価したい。山間地の生産条件不利地帯で農家と都市住民が消費を通じて支え合うCSAの先駆的な取り組みは、安定した食料供給を通じて都市と農村との関係を築き上げ、さらに次世代の農家の担い手が定着していると高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞

3. 特定非営利活動法人きみの定住を支援する会（和歌山県紀美野町）



官民協力のもとワンストップパーソンを設置し、19年間きめ細かな案内相談に取り組み地域に移住した人は215人。移住後に生まれた子どもも30人ほどになり、過疎化、高齢化が進む農山村地域の担い手となっている。移住者の創業による経済効果は年間約2億円。地元の農産物を利用して飲食業や宿泊業を起業する者、農業を始めて耕作放棄地の再生に取り

り組む者、高齢農家の農作業を助ける者も生まれている。また、農山村の移住定住に欠かせない、なりわい創りを学ぶ「きみの地域づくり学校」に協力し、移住後のコミュニティ・ビジネスの立ち上げにも貢献している。移住者に優しく寄り添う運営者たちの温かさを感じる。等身大の暮らしをそのまま紹介することを大切にし、移住者の暮らしや仕事づくりを見守り、応援し、PRするというバックサポートの姿勢が貫かれていると移住者に寄り添う姿勢が高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞

4. 特定非営利活動法人 ASO 田園空間博物館『道の駅阿蘇』（熊本県阿蘇市）



地域全体を屋根のない博物館と見立てた田園空間博物館事業を継続させながら、道の駅を指定管理者として運営。地域行政、農業、観光、ボランティア等と連携する運営体制により、地域特産品販売、商品開発、地域住民との連携等の改善が進み地域経済及びコミュニティの核として活躍している。業績が低迷していた該当施設を発展させただけでなく、地域のボランティア

と連携した地域散策イベント「阿蘇市をさるこう！」や留学生や台湾の人々と継続的に行っている国際交流事業、阿蘇の風景と特産品を楽しみながら行うサイクルーツリズム、阿蘇の草原を活用した牧野ガイドなど、従来の道の駅にない多くの関係人口を増加させる事業を実施している。また道の駅の地域生産物販売比率は42%から86%に上昇した。この結果には、地域の商品開発を支援する制度の創設や、新商品開発への積極的な取り組みを地域に促す活動が影響している。これらの仕組みは全国モデルとして広めたい仕組みとして高く評価された。

◆審査委員会長賞

5. ノートルダム清心女子大学×百姓のわざ伝承グループ（岡山県高梁市）



岡山県の北西部に位置する高梁市では、2013 年以降、百姓のわざ伝承グループの荒廃茶園再生活動によって、高梁紅茶専用の茶畑が拡大した。文学部現代社会学科の二階堂ゼミでは、フィールドワークの体験を通して、地域課題の実態を多角的に学びつつ、課題解決に向けた主体性や実践力を培うことをめざしており、その一環として、当初からこの活動に応援隊として関わっている。

さらに、2019 年以降、同大学人間生活学部食品栄養学科の吉金ゼミの学生が加わり、茶葉の科学的分析を通じて、高梁紅茶の特性解明にも尽力している。産学連携の効果で、2024 年は紅茶の茶葉の栽培面積が 50a、生産量が 600kg にまで拡大したほか、緑茶から変更し紅茶用として茶葉を提供する農家が 4 軒増えた。また、高梁紅茶の取次店も 16 年間で約 95 店舗に拡大した。さらに、ストレートティのほか、ゆずや生姜、レモンを加えた新商品も生まれ、それらを学生自らが販売する取り組みを通じて、高梁紅茶はもちろん、高梁市の魅力発掘・発信にも貢献している。

◆審査委員会長賞

6. やったろう de 高島（長崎県長崎市）



軍艦島に最も近い有人島(離島)。石炭の閉山により人口 1 万 8 千人から 234 名の過疎と高齢化の歯止めのかからない地域、美しい海の生物資源を活かしたエコツーリズムを地道に展開し、コロナ禍を乗り越え、やっと自然教育の最適の場として効果を上げてきている。サンゴや熱帯魚のある環境を生かしたシュノーケリングピクニックが魅力的なだけでなく、海の環境講習など正しい知識を多くの人たちと共有する機会をつくり続けているところが好ましい。知識と体験を両輪とし、中高生への教育機会をつくっている。こどもや若者の海離れが進む中で、今後も頑張ってもらいたい取り組みであり教育効果だけでなく、地域の自然を誇りに思うような資源の活用・環境の保全への姿勢は、必ずもっと求められることになるであろうと高く評価された。

◆審査委員会長賞

7. 特定非営利活動法人穎娃おこそ会（鹿児島県南九州市）



「後継ぎのいるまちをつくる」に則したプロジェクト制により都市との交流及びその資源となる空き家の活用、農業の観光的な活用により各種プロジェクトに取り組み農山漁村が本来持っている者を地域内の様々な人々と連携することで地域の活力が蘇っている。自営業、農業、農協、市役所、議員など多くの分野の方々が参加。文字通り町の総力を挙げての取り組みだ。空

き家を活用し、農林漁業の体験を現代風に活用して都市生活者のリフレッシュ休暇やインバウンドの促進を図っている。オーソドックスな方法だが、町全体が動くことで機能している。このエリアの魅力を地元住民自身が正確に把握し、尊重しながらのびやかに発展させていく活動であることが読み取れる。ひとつひとつの取り組みに派手やかさはないが、住民たちがそれぞれ好きで楽しくやっているという明るさが伝わってきて、元気な農山漁村の未来を感じると高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞ライフスタイル賞

8. 今井亮輔 氏（北海道壮瞥町）



昔から、豊かな資源を持っている田舎が大好きで、田舎の豊かさを守っていききたい、そのためには都会生活者の需要と、田舎の豊かな資源を結びたいと考えていた。40歳を前に、洞爺湖畔でぼんやりと湖に移る雲や中島を眺めている時に「ここに住みたい！」と強く感じ、自然派ワインやチーズなどを集め、地域の農作物や加工品、観光資源といった豊かな資源を楽しんでもらうことで、都会生活者とのよい循環が生まれると考えて2021年11月に地域おこし協力隊に着任し、2022

年8月には地域の方々の協力も得ながら無事に「ヨツカド商店」というワインやチーズなどの小売店兼カフェをオープン。北海道地域おこし協力隊ネットワークの副代表幹事の1人として活動もしている。オンラインコミュニケーションを活用して北海道の小さな町に住んでいても東京も北海道でも同じ条件でビジネスもできる。そうした可能性を切り開いてくれると感じられるとその将来性を高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞ライフスタイル賞

9. 石坂真悟氏 (山梨県小菅村)



東京農大と小菅村との協働の取り組みである源流大学の実習や村の資源のプログラム化を、地域おこし協力隊員とともにブラッシュアップしている。源流大学では、体験を重視していた実習から、販売を見込んだ野菜づくりや商品開発に向けたブランディング講座等を盛り込み、より農山村の現場に即した実践的な実習を行えるように計画を立てている。妻と2歳の娘の3人で隣の市に住んでいるが、仕事も暮らしも充実。休日は村のイベントに参加したり、最寄り駅から農作業に参加する方をピックアップして娘と村に向かうなど、隣市に住んだことにより、村(駅がない)へお連れすることができるようになった。過疎高齢化した山村地域の伝統芸能の継承するために、地域の伝統芸能の舞手やリーダーも務め、地域住民の安全安心を守る消防団にも移住当初から所属し、現在も部長の役職に就き活動をおこなっている。過疎高齢化した山村地域の伝統芸能を守り、農山村に住む人々の知恵や文化の継承に力を入れている。さらに、多摩川流域の地域との連携を図るなど源流地域の活性化だけでなく流域全体の活性化にまで発展していることを高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞ライフスタイル賞

10. 黒川喜美恵氏 (徳島県阿南市)



震災が起きて流通が止まった時、お金があっても食べものがないのだと痛感した。作れる人になりたい、作れる場所に暮らしたい思いが募り「作る」ができる場所を探し、未知の土地に移住した。近所の人から借りた畑を耕し農作業をスタート。暮らし始めた地域は水が綺麗なところで稲作が盛んだが、お米の消費量は減っていたので何か加工品にできないかとパンを焼き始めたところ地域にパン屋がないからと熱望され週に一度営業のパン屋を開業。同じころ、子どもが通う学校に学童保育がなく鍵っ子になってしまうのが心配で学童保育を立ち上げた。「子どもたちが地域の人たちをもてなす食堂」として「子どもの食堂」も立ち上げた。食を大事にし、「自分でつくる」ことの楽しさを伝播させているライフスタイルは高く評価された。

◆オーライ！ニッポン大賞ライフスタイル賞

11. 渡辺督郎 氏 （長崎県西海市）



26歳の時、青年海外協力隊事業に参加。帰国して自分の生まれ故郷の過疎化が気になり始めた。30歳の時、空き家になっていた祖母の家で学習塾を始めた。1999年地域回遊型のイベント雪浦ウィークを企画、運営を始めた。このイベントをきっかけに地域づくりに真剣に取り組むこととなる。2015年に地域づくりNPO法人を立上げて仲間たちと、ウェルビーイングを感じられる地域を創ろうと、日夜、地域資源を生かした観光地域づくりに取り組んでいる。2022年には、株式会社ゆきのうらを立上げ、オスピタリタ・ディフーザ雪浦というタイトルで分散型のおもてなしに取り組んでいる。1人、1軒、1店舗が頑張るのではなく、地域で連携して、宿泊、飲食、体験をそれぞれが担いながら、訪れる人も、迎える人も、楽しみながら活動できる地域を目指している。地域に居酒屋はないものの、週1、金曜日だけのビアホールを開催、地域の人々と旅人たちの出会いの場にもなっている。地域のお店の閉店という事態にも仲間を巻き込み救うのはもはやこの人しかいない、という存在感は高く評価された。

以上